

トピックス
1. 播州日誌「知床の岬」
2. 南国土佐を後にして 第4回



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 54
	2022年6月号

衣更え 華やぐ 芒種～夏至の候

日本では6月と10月に衣更え（衣替え）する習慣がある。6月1日を期して冬服から夏服へと変わる。少々厚苦しくなった冬服を脱ぎ捨てて、白がまぶしい夏服へ。学生達の制服の衣替えのニュースが新聞紙上を飾る。清々しさに笑顔をそえて。教室だけではなく、学校中がぱあっと明るく華やいだ事を思い出す。外に出れば街中がそのように見えて心楽しくなる。季節は初夏。厳しい暑さの夏への助走。夏の前ぶれの長雨は自然界では慈雨となる。生きとし生きるものに、あまねく降り注ぐ長雨。新緑の緑をいっそう色濃いく鮮明なものにする。万物は大きな成長の刻を迎える。季節を楽しもう。入梅までの晴れの日を大切にしよう。初夏の魚といえば鱧（はも）。恵の雨をたっぷり飲んで、鱧は一層美味くなる。職人技の骨切り、ふっくらとした白い身は湯引き、天ぶらが合う。そしてきっぱりと、鱧鍋。酒の肴としてこれほどぴったりくるものはない。季節を楽しもう。むしむしとした梅雨を明るい気持ちでやり過ごそう。



芒種 6月6日頃 夏至 6月22日頃

『龍馬と私』 ～ 龍馬の葬儀 ～

慶応3年（1867）11月18日午後2時頃。蛸薬師下ル、河原町の醤油屋「近江屋」より3つの柩が運び出された。坂本龍馬、中岡慎太郎、山田藤吉の柩であった。白張りの提灯が風にそよぎ群集の声を聞きながら土佐藩邸前より霊山に向かって葬列が進んだ。海援隊、陸援隊、そして在京渚藩の者たちが付き従っていた。

結局、土佐藩ではなく、あくまでも町家である「近江屋」の井口新助が葬儀を出す格好だった。葬儀に関し、土佐藩内の空気は微妙で、重役である寺内左膳の日記には概略、次のように書かれている。2度の脱藩をし、時節柄、特別に2度も許されているが兩名とも復籍しようともせず、ほったらかしの状態であったことから、当藩と今度の事（暗殺）は無関係とする。龍馬は土佐藩から冷たく扱われている事はわかっていた。幼馴染の土佐藩士望月清平に10月18日付けで書いた龍馬の手紙には次の様に書かれている。自分は土佐藩邸に入ることもできず、かといって二本松の薩摩藩邸に入るのとはばかれるため、もし、刺客に襲われたら近江屋で一戦する。その上で死んだらその骨くらいは土佐藩邸で引き取ってくれるだろう云々。

龍馬の予想通りとなったが、土佐藩は龍馬の骨を拾うどころか葬儀すら



出さなかったのである。幕末の英雄、坂本龍馬も当時は無名に近く、いくつかの偉業も縁の下の力持ちのような存在で一般大衆はその存在さえ知らなかったと思う。歴史とは皮肉で面白いものだと痛感している。

出典 楠木誠一郎著 坂本龍馬74の謎 成美堂出版



播州日誌

知床の岬

知床（しれとこ）の岬に、はなますが咲く頃。名曲「知床旅情」の歌い出しの部分である。大学時代、ゼミ仲間と肩を組んで歌った事や、森繁久彌の歌のまねをして笑いころげたものであった。1988年リリース 森繁久彌作詞作曲で加藤登紀子や谷村新司がカバーして大ヒットした。思いがけない海難事故でこの歌を思い出した。知床岬観光の遊覧船が4月23日、名所カシュニの滝付近で沈没。乗員乗客26名が消息を絶ち、5月26日現在、今だに12名の行方不明者がいる。事故後次々と出てくる安全航行違反。ずさんな行政の監査などの実態が浮かびあがってきた。島国である日本では全国津々浦々に海岸美の名所があり、遊覧船の数も多い。観光会社の社長の発言や失態はみる者に怒りを感じさせる。結果責任はもち論だが、ないがしろにした安全航行対策のずさんさが目に余るのだ。いつも被害が出てから一切査察などが始まる。業者も行政も人の命の大切さを考えるなら、もっと緊張感を持つべきだ。北の海は荒れやすく厳しい寒さでもある。潮の流れも早い。被災者の人達の無念さを思うと心が痛む。危険に対する想像力が余りにも貧弱すぎる。

日本サルベージによる船体の引き上げが順調にすすみ、事故原因の究明を急がなければならない。そして、今なお北の海を漂う行方不明者の救助が進むよう祈るばかりだ。知床の岬は黙して語らず。大自然の中で孤高の美しい姿を見せ続けている。



2022. 5. 24

情報氾濫社会を生きる

JR各駅から出されていたカード型の「時刻表」が廃止された。IT活用でスマホで検索すれば簡単に出てくるので時代に合わせて廃止を決めたという。なるほど。グーグルの音声検索で1発で画面に現れて問題解決である。しかしちょっと待って欲しい。スマホを持たぬ高齢者はどうなる。機械オンチの人は仕方がないですむ問題だろうか。私も高齢者である。この手の年寄りいじめには慣れっこで、時代の流れと割切ってあきらめているし、必死で最低限のお付き合いをしている。情報の氾濫。私達の目は2つであり耳も2つである。TVのチャンネルはどれ程あるのだろう。地デジにBS、CS、有線、それにSNSのYouTubeやツイッターなどなど。数えあげれば枚挙にいとまがない。私達に与えられた1日の時間は24時間。3分の1ずつに分けたとしても仕事・睡眠・その他の時間が8時間ずつ位しかない。放送の内容をみてみれば殆ど似たり寄ったり。正直に言ってどうでもよい番組とCMばかりだ。悪書の氾濫。1日100冊程度の本や雑誌が出版されている。難しすぎて訳のかわらない作品、くだらないエロ小説、一発狙いの健康本。ダイエット本も出ては消え、消えては出ている。A医師とB医師とでは言い分が違ふ。読者はその都度迷ってしまう。中国、ロシア、韓国等の悪口を書けばあたると言われる実情。殆どがしっかりとしたエビデンス（証拠、根拠、裏付け）のな

い書物が多い。著者は自分の書いた事に責任をもたねばならない。サプリメントの売込みもけたたましい。足、腰、ひざ、肩、目、耳、体中の不調、内臓的な疾患、便秘に頻尿。どれ程のサプリを飲まなければならないのか。中にはあやしげなものもあるし、金取主義の見え見えのものもある。新聞紙上の広告の多さには驚く。新聞の発行は購読料と広告収入でまかなわれる。14版28頁程の分量だが、全面広告が3~4頁、4段下の広告が殆どどの頁にあるとすれば全紙面の1/3近くが広告という事になる。公共性の面で問題はないだろうか。大広告主に批判的な記事が書けるのだろうか。現実の問題として。情報の氾濫。新聞、雑誌、TV、SNSなどからタレ流される情報の危うさ、フェイクニュースや無責任な誹謗、中傷。出会い系サイトでの性的犯罪も跡をたたく、電話やメールでの振り込め詐欺も横行している。

公共の電波などを使って、社会的な害悪がたれ流されている現実を知らなければならない。既にその情報量は優に私達の判断能力の枠を超えている。行政の監督や規制も、何か大事故や大事件がなければ動かない。政治家達の庶民感覚も疑わしい。便利さを追求する余り、大切な人間性を喪失しているのが現実だ。こうなると、自分自身がしっかりと身を守らなければならない。嫌な世の中ではあっても、私たちは寿命が尽きるまで生きなければならない宿命を負っている。若い人達のカも借りて「見ざる聞かざる言わざる」ではなく、「よく見てよく聞いてよく意見も出して」情報を見きわめる事が大切だと思う。



2022. 5. 29

~南国土佐を後にして~

第4回 「神戸編」

親爺が生業にしていた自転車屋のすぐ近くに、三姉妹のおばさん達が経営していた駄菓子屋があった。まだ1円未満の50銭という金種があり、飴玉でも2個1円というのがあった。包装紙もいい加減なもので、大体は古新聞を適当な大きさに切ったものだった。「ベロ」という変な駄菓子があって、カタクリ粉をお湯でといて小判型にしたものにキナコをまぶしただけのものだが、甘味に飢えていた子供達は喜んで食べていた。1つ1円か2円。例の古新聞の切れ端におはしでつまんでのせてくれる。それを喜々として食べるのである。人気があったのがラムネ菓子でクジを引いて舌でなめると「スカ」とか「ハズレ」が浮かびあがる。

特賞1等2等・・・が出る事もあるが殆どが「スカ」「ハズレ」である。ラムネをお城や教会、英雄やキャラクターの形に作ってある。特賞ともなれば外れの10倍ぐらいの大きさでりっぱなものだった。ある時、姉に頼まれて駄菓子屋へ行きクジをなめたところ特賞が当たった。大きなサイズのきれいなラムネ菓子が欲しくて急いでうらから母にお金をもらってもう一度クジをひき「ハズレ」の分を姉に渡して、特賞は自分が食べてしま

った。生まれて初めての悪事だったと思う。そんな駄菓子屋さんがある日突然商品にカバーをして黒白の幕を張りだした。何だろうと思っていたら末の妹さんが感電死したという。子供ごころに恐ろしく人の死を身近に感じた最初だった。自宅での葬儀が普通だった当時、出棺の際に近所中から集まった子供たちに供え物を分けあたえる。20人~30人の群れのなかにいた私が得たものは三方に敷いてあった白い紙一枚。持って帰った私は家族中から笑い者にされた。「お前はアホか」「この白い紙の上ののっていたものをもらってこんか」とえらくしから



れた。自分でも納得だった。自転車屋を経営する傍ら親爺は自転車振興会に所属していた。戦後復興の1つとして各地で「競輪」がたちあげられた。神戸競輪もそのひとつだった。審判長と自転車屋の2本立てで経済時にもやや安定した時期だった。ところが部下が多額の使い込みをしその監督責任を問われて退職に追い込まれてしまった。小さな自転車屋1本では、とても8人家族の生計が立てられなかった。その頃、母の弟が高知でクリーニング屋をしていた。当時戦後の混乱期でもあり、ブラジルやパラグアイなどの南米への移民が盛んだった。国内での貧困に耐えられず新天地に夢を描いて多くが日本を出国した。結果的には成功をおさめた人もいれば夢破れて帰国するもの相次いだ。母の弟はパラグアイでクリーニング屋を開く事を夢見て移民となったが、10数年して夢破れて帰国する事になる。それはともかくとして移民が決まった時クリーニング屋の処分に親爺が飛びつき家ごとそれなりの金額で買い取った。そして私達家族8人は高知へ移住することになった。元々、高知は親爺の故郷であり地の利はあった。高知市棧橋通り1丁目。市電の停留所（帯田）のすぐ前に、古びた住居とクリーニング屋の店舗があった。当時は小学校3年生、わずか9歳の私には詳しい事はわからなかった。多分、親爺の1つの賭けだったのではないかと思う。神戸港、中突堤から家族が3グループに分かれて出発。何もわからなまま姉に手をひかれて歩いたのを覚えている。不安を感じる程、大人ではなかったし成り行き任せの高知への移住だった。こうして私は生まれ故郷の神戸を去り、第二の故郷高知での生活を始める事になった。

年度更新・算定基礎届のお知らせ

そろそろ年度更新・算定基礎届の季節です。年度更新は緑色（もしくは青色）の封筒、算定基礎届は日本年金機構の茶封筒が届くかと思います。事業主欄にゴム印を押印の上（複写式）、用紙と必要書類をご準備ください。

《年度更新・必要書類》

- ・令和3年4月1日～令和4年3月31日までに支払った賃金（全従業員分と雇用保険加入者分）

《算定基礎届・必要書類》

- ・令和4年3月～6月に支給した給与 ※社会保険加入者のみ
(月別・個人別に総支給額がわかるもの)
(算定自体は4～6月で行いますが、3月分からの昇給を見て、月変が必要な場合には月変も同時に行います。)

締月と支払月が異なる事業所さんは注意が必要です！
支払ベースでお知らせください！

★期間中に昇給・降給・給与形態の変更した方のいる場合はお知らせください。

～熱中症からあなたを守る5つのポイント！～



- ①こまめな水分補給
- ②涼しい服装と日傘・帽子の使用
- ③扇風機・エアコンの上手な利用
- ④バランスの良い食事と十分な睡眠
- ⑤冷たいタオルや保冷剤の活用



《 屋外で人と十分な距離が確保できる場合には、マスクを外すようにしましょう！ 》